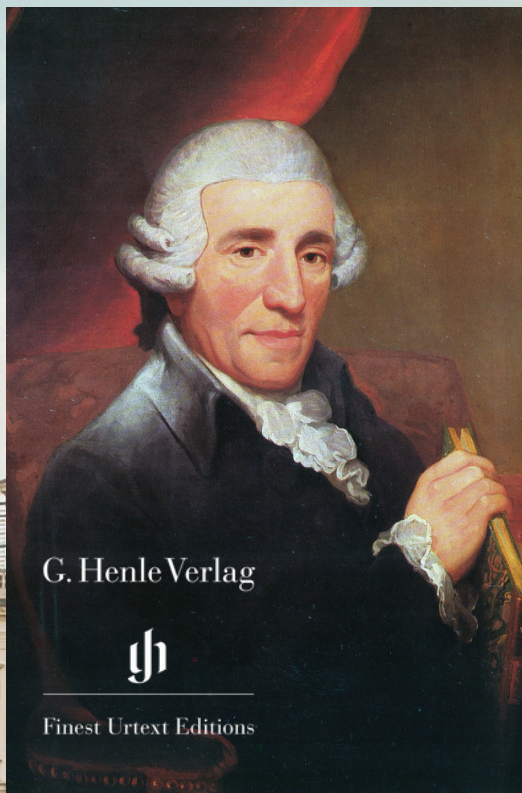


J. ハイドン

ピアノ協奏曲 二長調 HOB XVIII:11



この作品は ...

- ハイドンによる3番目にして最後のピアノ協奏曲。
- 自筆譜が現存していないため、この作品の正確な成立年月日は明らかではありません。
- 1780年から1783年の間に書かれたと考えられていますが、その理由は1780年代初頭にモーツァルトのピアノ協奏曲が成功を収めていたからかもしれません。
- 初版楽譜は1784年にウィーンとパリで同時に出版されました。その後すぐにロンドンやマインツなどでも出版されました。
- この作品は、シンプルなモチーフから偉大な音楽を生み出すというハイドンの芸術の典型的な例です。

ヘンレ版について

- 当時の慣例と同様に、ソロ・パートにはオーケストラのパッセージの低音（数字付き）も含まれています。ソリストは指揮者でもあり、こうすることで音を増幅して通奏低音を演奏することができました。

有名な楽章／モチーフ

- 18世紀に流行したヴェルブンコス様式を彷彿とさせる、情熱的な「Rondo all'Ungarese（ハンガリー風ロンド）」。
- わくわくする細部：ソロ・パートでのほぼ「騒々しい」効果音（150小節以降）。

Haydn

Urtext

Klavierkonzert
D-dur Hob. XVIII:11
Klavierauszug

Piano Concerto in D major
Hob. XVIII:11 • Piano Reduction

面白い事実

- この人気の協奏曲の信ぴょう性について、初版の出版後、ハンブルクの音楽雑誌で疑問が呈されました。というのも、ハイドンの名の元に出版された版があまりに多かったために「少し疑わしい」とされたのです。
- しかし「ハイドンに近い」写譜が、作品の信ぴょう性を支持しています。